

# 「観音三十三靈驗所」の形成に関する一考察

成 田 俊 治

## 目 次

- (一) 序 説
- (二) 平安朝に於けるその分布
- (三) 成立年代について
- (四) 形成の社会的基盤
- (五) 結 論

## (一)

日本に於ける観音信仰が、飛鳥、白鳳時代を通じ、観音経の講説、写経等によつてうかがわれ、又奈良朝に於けるそれが、続紀及び正倉院文書等に見られる観音経一班の書写、或は三月堂、聖林寺、唐招提寺等諸寺の観音像の彫造

等、その数の増加によつて観音の信仰が盛んになつた事が推定される。之等、彫像、写経による信仰が、一つの観音信仰としての形態を示す過渡的段階にあると云い得るならば、平安時代の観音靈驗所の形成は、社会に顕現された観音信仰の具体的な展開であると云い得るであらう。その様な発展過程をとるに至つた社会的必然性は、平安時代に於ける仏教全般の密教化と、利己的、且、個人的信仰の形成からであつた。

即ち平安時代に於ける仏教が、祈禱呪願に対する一般の要求を満たす為、甚だ呪術性に富み祈禱万能主義となり、人々は自己の発展の爲祈禱を行い、又種々の事柄に対して

もそれを利用する様になつた。ここに信仰は個人的なものとなり、現世的利益を求める信仰となつたのである。この個人的な現世利益的信仰に伴つて、仏像や寺院にそれぞれ靈驗利益の名を得るものが現われ、それは教理を離れ、一般の信仰対象となつて行つたのであり、ここに現世利益を授ける觀音靈驗所と云われるものが成立したのである。

この觀音靈驗所は、平安末期に至り三十三觀音靈驗所として形成されるに至つた。即ち、園城寺前大僧正行尊、覚忠の巡礼手中記、三十三所巡礼記に觀音靈場として三十三所を挙げてゐるのが、記録されている最初のものである。勿論三十三所は、花山法皇に始まると云われているが、

「幻雲稿」の著者、幻雲和尚はこの事に対して、「事在工作」と云つてゐる如く事實は明らかでない。故に覚忠、行尊の巡礼記により始めて三十三所が記録されている關係上、十二世紀中葉頃には既に形成されていたと考えられる。

では、この三十三所が形成される以前に於て、平安時代を通じてどの様な靈驗所が成立し、又それ等が三十三所として明瞭に形成されたのは何時頃であるか。更にそれを形

成せしめたところのものは何か、と云う一連の問題について考察せんとするものである。

## (二)

觀音三十三靈驗所が、平安中期以後、三十三所を成立せしめる為に続々と出来たものでない事は云う迄もない。それは、平安初期より觀音信仰の發達に伴ない順次出来上つたものであると考えられる。その意味に於て、三十三所形成以前に、どの様な靈驗所があつたであらうかと云う事をまず考えなければならぬ。

弘仁年間(八一〇〜八二三)成立の日本靈異記を見るに、觀音靈驗譚は上中下合せて十八挙げてをり、その中、觀音を祠り利益ある所として、大和殖槻寺、同下毛野寺、和泉珍努上山寺、大和向(穴)穗寺、大和泊瀬寺の五ヶ寺が記されている。之等の寺は、それぞれ觀音が奇瑞を示し、そこに參籠し觀音を念ずる事によつて、貧をのがれ、大富を得、又命を全うした事を述べてゐる。この様に靈異記に於ては右の五ヶ寺が表われているが、之等の寺が純粋な觀音

靈驗所であつたかは疑問であり、未だ靈驗所と云わるべきものではなかつた。

次に永観二年（九八四）成立の三宝絵詞の下巻、長谷菩薩戒の条に、長谷寺十一面観音の縁起を記して後、

「徳道道明等が天平五年にしろせる観音の縁起並に雜記等にみへたり。そののち利益あまねく。靈驗もろこしにさへきこへたり」

と長谷の観音の靈驗が中国に迄聞えていた事を記していることから、長谷寺の観音の靈驗あらたかであつた事が既に幾内は勿論、中国にまで伝えられていたと考えられる。又石山寺<sup>③</sup>に關しても同様な事を記してをり、この二ヶ寺が靈驗所として挙げられる。

長久元年（一〇四〇）鎮源の著した本朝法華驗記によると上巻第十四、志摩国富洞宿雲浄法師の条に、

「為拜靈処。參詣熊野」

同書中巻第六十、蓮長法師の条には

「亦往詣金峰熊野諸名山。志賀長谷等諸靈驗。往於一々靈驗名山。誦誦千部妙法経。日本国中一切靈所。無不巡

観音三十三靈驗所の形成に關する一考察

礼必誦千部」

とあり、蓮長と云う僧が吉野金峯山、熊野、志賀、長谷を挙げ、之等の靈所を始めとして、日本国中の靈所と云われるものを巡礼した事が知られる。

又同書第七十五、齊遠法師の条、及び下巻第百五十、周防国判官官代某の条に

「住玖珂郡三井山寺。其寺観音。靈驗揭焉」<sup>④</sup>

周防玖珂郡云々其郡有山寺。名三井、観音瑞像。靈驗顯然」<sup>⑦</sup>

と、それぞれ周防国の三井観音の靈驗顯然たる事を挙げてゐる。

同書下巻第八十三、楞嚴院源信僧都の条に

「參詣郡内靈驗高尾寺云々」

同書下巻第八十九、越中国海運法師の条に

「參向立山及余靈驗、祈禱此事云々」

とある如く、高尾寺、立山、白山が靈驗ある所として挙げられてゐる。更にここに注意すべきことは「往詣靈驗所、難行苦行、往越中立山」<sup>⑩</sup>と云つてゐる如く、靈驗ある名山

寺を靈驗所と云つてゐる事である。之等の例を見ても知られる如く、全国に靈驗所があり、それ等の靈驗所を難行苦行によつて巡拝した事が巡礼と云う言葉で表わされているのである。靈異記、三宝絵詞によつて示されているものが観音の靈驗ある所としてのみ奉じているのに対し、法華經に於ては、靈驗ある所を靈驗所と呼び、それ等の靈驗所を巡拝巡礼すると云う動的な信仰形態が起つた事がうかがわれる。之等の靈驗所の他、清水寺、六波羅密寺、書写山等を挙げてゐる。

次に承暦元年（一〇七七）以前の成立と考えられる今昔物語によると、卷第十一以下本朝篇の至る所に観音靈驗譚を挙げ、特に卷第十六は全て観音靈驗説話で飾られている。そして

「人願と求ムル事有テ、此ノ観音ニ心ヲ至シテ申スニ靈驗ヲ不<sub>三</sub>施給ト云フ事無シ」<sup>⑪</sup>

と清水寺創建の所に述べられているが、之は一に清水寺に限らず、全ての靈驗所に対する考え方であつたらうと思はれる。今同書の中から靈驗所を抽出してみると、周防国三

井観音一、丹後国成合一、大和国殖槻寺一、清水寺七、大和国穗積寺一、大和国下毛野寺一、和泉国珍努山寺一、大和岡本寺一、近江国石山寺二、大和国長谷寺六、山城国六角堂一、大和国龍蓋寺一、を挙げ、他に金峯、熊野を数えている勿論之等の中には靈異記の系統を引くものもあるが大半は今昔物語の取り上げた靈驗所である。その中、清水寺は七回、長谷寺が六回とそれぞれ靈驗を述べられてをりこの二ヶ寺が信仰対象として最も多かつた事が知られ、そして「亦金峯、熊野、長谷寺ノ諸ノ靈驗所ニ詣テ云々」<sup>⑫</sup>

「国々ニ所々ノ靈驗所ヲ礼マムト思テ熊野ニ詣ルニ」<sup>⑬</sup>とある如く各地方の靈驗所を巡礼した事が知られる。しかもその靈驗を受け、信仰した階級が、靈異記に於ては約六五パーセントを僧侶、或は上層階級で占め、庶民階級は三五パーセントに過ぎなかつたが、今昔物語に於ては、庶民階級が全体の約五〇パーセントを示している事は、庶民の観音に対する信仰が増加し、之等の靈驗所巡礼が普遍化した事を示すものである。

更に、嘉応元年（一一六九）後白河法皇御撰になる梁塵

秘抄を見るに、之は平安末期に於ける今様を挙げており、それによると

「観音しるしを見る寺、清水、石山、長谷の御山粉河近江なる彦根寺、真近く見ゆるは六角堂」<sup>⑭</sup>

「験仏の尊きは、東の立ち山、美濃なる谷汲みの、彦根寺、志賀、長谷、石山、清水、都に真近き六角堂」<sup>⑮</sup>

とあり、この二歌からの等の靈験所が公卿階級を始めとして庶民の間に知れ渡つていたと考えられる。その中、彦根寺に關して、扶桑略記、白河天皇、承暦三年（一〇七九）三月八日の条に

「同年、撰津国水田郡石良里有沙門徳満者」（中略）生年二十歳、兩眼忽盲、經三十二年參鞍馬寺祈禱無験、從寺出參籠長谷寺祈請至第七日夢見自御帳中老僧出来と云、我力不及汝當往近江国大上西郡彦根山西寺觀音靈驗之处致誠祈願三日之内、各曰有験、夢覺以後出長谷寺」

同、三月九日の条に

「參着彦根山西寺、泣致祈願、至第三日成刻、兩

觀音三十三靈験所の形成に關する一考察

眼忽開、始見仏前灯明一件僧今住彼寺、常修長講」と、彦根寺の靈験を述べてをり、又中右記にもその十年後の寛治三年（一一〇八九）十二月廿四日の条に

「凡今年京中上下多以參詣此寺、予具申中納言殿參詣也觀音靈験以今年為徵云々は世間之説、人々致信也」

と云い、此寺とは彦根寺を云つているのであるが、この彦根寺の觀音が今年に限り徵はずと伝えるを人々が之を信じて參詣するものが多かつたと伝えてゐる。又、清水寺、六角堂に關して、同じく中右記、長承元年（一一三二）三月十七日の条には

「三宝上吉已当十八日、參詣清水寺、六角堂之輩數千萬此雨成妨也歎」

と、十八日の觀音の日に清水寺、六角堂に參詣した人々が數千万あつたと誇張して伝えている。之等は、十一世紀後半からの都を中心とした觀音信仰の盛大さを示すものであらう。

次に宝物集によれば

「我朝ノ四天王寺ニハ、仏法ノ始救世ノ姿ヲ顯シ給フ、

南海ノ辺ニハ、熊野ノ権現、西ノ御前ニハ、千手顯現ナリ、北領ノ麓ニハ、日吉山王八王寺觀音垂迹ニアラズヤ、穴生ノ觀音ハ、仏師ニ代リテ射ラレ給、成相ノ觀音ハ、猪ニ成テ行者ニ食レ給、金前ノ觀音ハ女ニ変ジテ、女ニ男ヲ合セ、粉河ノ觀音ハ童ニ顯テ人ヲ祈リ給フ」  
 として、丹波国穴生、丹後国成相、美濃国金前、紀伊国粉河を教えている。

以上大体、平安初期より末期にかけての靈驗所を文献の上から挙げたのであるが、之等全部が必ずしも純然たる觀音靈驗所であるとは云い切れず、そこには神仙思想、或は權現信仰等が加味されているものもあると考えられるが、こうした関係の考察は後に譲り、更に論を進めたい。(尙之等靈驗所の一覽表を末尾に挙げたから参照されたい)

- 註 1 上巻第6・15・17・18・20・30・31 中巻第17・24・36・37・42 下巻第3・7・12・13・30・38
- 註 2 大日本仏教全書 伝記叢書 四六〇頁
- 註 3 大日本仏教全書 伝記叢書 四六二頁
- 註 4 統群書類従第八輯上伝部 一二四頁
- 註 5 統群書類従第八輯上伝部 一五四頁

- 註 6 統群書類従第八輯上伝部 一六三頁
- 註 7 統群書類従第八輯上伝部 一九〇頁
- 註 8 統群書類従第八輯上伝部 一七〇頁
- 註 9 統群書類従第八輯上伝部 一七五頁
- 註 10 統群書類従第八輯上伝部 下巻第百廿四越中国立山女人の条 一九五頁
- 註 11 岩波文庫本卷十一 第卅二
- 註 12 岩波文庫本卷十三 第廿八
- 註 13 岩波文庫本卷十三 第十七
- 註 14・15 国文東方仏教叢書 文芸部下 靈驗所哥
- 註 16 大日本仏教全書一四七 卷三

(三)

以上述べた如く、平安時代を通じて各地に靈驗所なるものが成立したのであるが、では、それ等の寺院を含めた、三十三所なるものが何時の頃より形成されて来たのであるか。

① 慧鳳の「竹居清事」の「博桑西州三十三所巡礼觀音堂圖記」に

「吾土有巡礼之語、不見之図記、亦不得之於聖

詰賢策之際、蓋巡者、如狩巡之巡也、礼者敬而礼之也、聞之古老、曰、吾花山上皇、既厭三方機、託之嗣宮、永觀中、克落聖髮、而躬御勤息之服、尊浮屠仏眼上人、而為師、上皇因允其所請、而上人所請無他、昔養老年中、大和州長谷寺、有僧德道上人者、疾而絶矣、殆數日、遂甦、如寢復醒、冥府制敵、官吏用法、皆如人間所畫、閻王勅上人、大期末限、可歸本土、且有光世音堂、在三十三所、所最欽也、告之其人、人露福匡測、上人恐其或無之信者、王乃賜之三十三印、印各有三十三之名、上人乃甦告之人、人未之信矣、上人感楚璞之辱、收之授之中山寺、到今得道之氣猶鬱矣、願力不足振之、以此爲憾、上皇遂遣中使、遠謁中授之中山寺、訪之寺僧、印文不固、累累三十三印、以安之三十三所、上皇与仏眼、偕親詣之<sup>②</sup>とあり、又竜沢の「天陰語録」に

「日本国養老年中、和州長谷寺有威光上人者、病而氣絶入冥府逢閻羅王、王曰、日本国有観音大士靈場、其数三

観音三十三靈驗所の形成に關する一考察

十三也。臨飯本土、告之令人結善因、只恐人不信之、乃賜三十三印、各有三十三所之名、上人蘇生、徧告國人、然後收閻王王印於撰津中山寺也、其後二百年、寛和二年夏、寛和上皇厭世相、幸華山寺、脫屣寶位、薙髮以著眇服、法諱入覺、時年十九、与世尊出家同其年也、天下靈区、徧印足迹、聞三十三所靈異、一々巡而礼之、至尊猶爾、矧庶人乎、爾來巡礼之人、溢于村、盈千里<sup>④</sup>又、月舟寿桂の「幻雲稿」所載「清水山新建慈願寺幹縁疏有序明庶、七年戊午」にも

「蓋三十三処、乃養老年中和州長谷寺僧德道上人、自闍王殿上所得三十三印分而所鎮也、於是上皇傾誠大士、王趾巡遊不憚難險、事在口碑、不肯瀆告、爾來士庶皈仏者、不一詣之則終身耻也<sup>⑥</sup>」  
とある如く、花山法皇が僧仏眼の勸に従ひ、撰津の中山寺より長谷寺の徳道上人以來の伝来と称する観音三十三印を召寄せ、之を三十三所に奉安し、法皇自身、仏眼と共に巡礼を行われてから三十三所巡礼が起つたと云う事を記している。故に一応花山法皇にその起源を求め得られるが、し

かし「竹居清事」に「聞<sub>三</sub>之古老」と云い、又「幻雲稿」にも「事在口碑」と云つてゐる事から、之等の説は、古くから伝承せられ、古老から聞いたたり、それがどこまでも「口碑」に過ぎなかつた事を知るのである。我々は単なる口碑ぐらいでは花山法皇にその起源を求める事は出来ない。この考えて来ると、果して法皇が三十三所巡礼の始祖か否かを明す事は出来ないが、しかし花山法皇が、数ヶ所の観音靈場を参拜された事は事実として挙げられている。即ち、北朝貞治二年（一一三六）の「新拾遺集」に

「修行させ給ひける時、粉川の観音にて御札にかかせ給ひける御歌」<sup>⑦</sup>

と云う詞書のある法皇の御歌が收められている事によつてうかがわれる。

更に三十三が始めて書物に見えたのは、文治三年（一一八七）の千載集の釈教部に、前大僧正覚忠の歌として

「三十三所の観音をがみ奉らんとて、所々まいり侍りける時、美濃の谷汲にて、油の出ずるをみてよみ侍りける」<sup>⑧</sup>

と、詞書のある歌が挙げられているのが最初である。そして、寺門伝記補録、第十四覚忠の条に<sup>⑩</sup>

「応保元年正月、巡<sub>三</sub>礼三十三所観音靈場、日数七十五日」

と、応保元年正月（一一六一）より七十五日間を要して三十三所を巡礼した事を記している。又、同じく、寺門伝記補録、策九聖願寺の条に「前大僧正覚忠三十三所巡礼記、日数七十五日」として一番から三十三番迄の順序を挙げているのは、この応保元年の巡礼行を示しているものである。この様な事実から、応保元年頃には既に三十三所巡礼が行われていた事が知られる。

所が、同じく寺門伝記補録、第十三行尊の条に<sup>⑫</sup>

「摠好<sub>三</sub>抖擻、巡<sub>三</sub>礼観音靈場三十三所、日数百二十日」とあり、同書、第九聖願寺の条に、覚忠の巡礼記と同じく

「前大僧正行尊三十三所巡礼手中記」として、一番から三十三番迄を挙げている。彼が何時巡礼したかははつきりと規定出来ないが、彼の没年が、覚忠の巡礼した応保元年以前、長承四年（一一三五）二月四日であり、又、伝記の上

から推察すれば、彼が修行を積み、重々しい身分と成つた後の事と見るよりは、年若き抖擻行脚の修行時代であつたと見る方が妥当であるから、嘉承二年（一一〇七）十二月鳥羽院の護持僧となつた以前に巡礼していたと見たい。斯くすれば、覚忠の巡礼より約六十年以前に既に巡礼が行われていたと考えられるのである。

従つて、三十三所巡礼は、花山法皇の時代、寛和年間（九八五〜九八六）には、数ヶ所を巡拜する事はあつたけれども、未だ三十三所巡礼なるものは形式されておらず、行尊の嘉承二年以前に於ける巡礼により、一一〇七年以前には既に三十三所巡礼が行われ、大体、花山法皇より堀河天皇に至る約一二〇年程の間に三十三所巡礼は形成されて来たと考えるのである。

- 註1 東福寺栗棘庵の僧（一三九四—一四二七）
- 註2 統群書類従第十三、五山文学全集第三、二八一—二九頁
- 註3 建仁寺僧（一四二一—一五〇〇）
- 註4 統群書類従第十三、卷三三九、二二頁
- 註5 天文二年叙（一五三三）
- 註6 統群書類従第十三、卷三四二、一五一頁

観音三十三靈驗所の形成に関する一考察

註7 「昔より風に知られぬともし火の光にはるる後の世のやみ」釈教の部

註8 大日本仏教全書二二七、寺門伝記補録第十四、二二四頁參照

註9 「世をてらす仏のしるしありければまだともしびも消えぬなりけり」

註10 大日本仏教全書二二七、二二四頁

註11 大日本仏教全書二二七、一三五頁

註12 大日本仏教全書二二七、二二九頁

(四)

かくの如く、花山法皇より堀河天皇に至る間に三十三所巡礼が形成されて来たと考ええる時、その間に於て、三十三所巡礼を形成せしめた何ものか、所謂その形成の基盤となつたものは何かと云う事を追及しなければならぬ。

まず、当時の社会を見るに、後冷泉天皇永承六年（一一〇五一）末法到来と云う思想は、当時の世相と適合して、人々に不安な心を抱かしめていた。種々の天変地異、或は既成教団の腐敗墮落は末法到来の意識を一層強め、平重衡が南都仏教寺院を焼いたが、これこそ末法であり、仏教滅亡

の時期であると京中の人々が悲嘆にくれ、所謂正法衰滅し、行証も失われ行く時代となつたのである。この社会に充満している末法思想が、平安中期以後に於ける信仰形態の大きな根底をなしている事は云う迄もない。

こうした末法の世であると云う意識は、人々をして現実嫌悪の感情をかもし出し、それは阿弥陀仏の救済を渴望する宗教的心理を抱かしめる事となり、後世安楽の浄土教的他力信仰の發達となつたのである。更に又、この世に於ても利益を得ようとする現世利益、即ち、暗い世相、混乱した社会の中で、少しでも安楽に暮せる様、又幸福を求めようとする要求の現われは必然的であつた。この要求を満たすものは観音菩薩であり、法華経普門品に於ける、所謂空間と時間とを超越し、それは来世に平安を求めもの、現世の幸福を求め者、如何なる希求、願望に対しても応現し、種々の変化身を現わして一切衆生を濟度すると云う、慈悲救済の観音の性質は、全く實質的な現実的な欲求の礼拜的对象となつたのである。ここに平安時代に於ける観音信仰の盛んになつた一因が見出せるのであり、この観音信

仰の發達が、教理を離れ、呪術性に富み、祈禱万能主義に墮した当時の仏教界の風潮と相まつて、現世利益を授ける観音靈驗所が成立したのである。之等は一般の信仰を集め「中右記」寛治三年（一〇八九）の条にもある如く、

「凡今年京中上下多以參此寺（彦根寺）云々觀音靈驗以今年為徵云々」

と、近江の彦根寺の観音が、この年靈驗を現わしたと云うので、京都の民衆が競つて參詣したとあり、又、十八日の観音の日に、清水寺、六角堂に參詣した人々が数千万あつたと伝えてゐる。（「中右記」長承元年三月十七日の条）又梁塵秘抄にも、(二)に於て挙げた如く、観音驗を現わす所として、清水、石山、長谷、粉川、彦根寺、六角堂を挙げ、之等の靈驗所が、一般の信仰を得、人々は現世利益を得んが為に巡拜したのである。以上の様に、現世利益の信仰が、仏教の呪術的風潮と結びついて靈驗所なるものを生ぜしめたと云う事が、三十三所巡礼形成の一つの基礎となつたと考えられるのである。

更に、巡礼そのものについては、「ひじり」そして「頭

陀巡礼」の修行形態がその基盤ともなつた。「ひじり」と云われるものは道心堅固、持戒忍辱の行者、そして隱遁の行者に対する特殊な尊称であつたが、それは、平安時代に於ける、世俗化、形式化、貴族化した仏教界にあつて、真に道心を求め、宗教的欲求にめざめて求道の生活を維持し、仏教界より改めて遁世し、入道したものであつた。即ち念仏行者としての阿弥陀聖、或は起塔、造像、写経等の修善行者としての勸進聖。又遊行廻国の修行者としての遊行聖として各地を巡歴したのである。空也上人は、天歷四年（九五〇）より応和三年（九六三）に至る十三年間にわたり諸国を廻り、念仏を鼓吹し、仏事を唱え、又中右記に見られる様に、慈惠聖人の貴賤を勸進して一日の中に一切経を書写した事等により、之等聖の遊行的な形態が見出せるのである。又当代仏教の世俗化に対し、真に道心を目醒め験力を得んとする最良の道が、都を離れた、政治の外に立つ山林である考えを基に、山林に入り苦修練行をつむ験者の一郡は、「今昔物語」に挙げてゐる様に、愛宕、葛川、葛城、熊野、伊吹等の名山幽谷を自己解脱の修練の場とし

て、苦行をつみ、又山から山えと行脚する事もあつた。そしてこの靈地に於て、貧賤慧を抖擻し、内外六入を抖擻し、形心清淨ならしめて、乞食を行う頭陀の行が行われたのである。この様な仏教の修行形態の上に、円仁、成尋、喬然等が大陸に於ける名山靈跡を巡弘し、或は参籠して靈応と啓示を得んとした事が仏教界に大きな影響を与えた。之等の影響を受けて日本に於ても、名山靈寺を巡礼し、或は一山内を巡礼する風が起つて来たのである。ここに入唐僧の大陸靈跡巡拝と「ひじり」の遊行的形態、更に「頭陀巡礼」とが相まつて靈寺巡礼と云う形態を作り上げたのである。以上の如く仏教の呪術的風潮と、現世利益を求める信仰とが靈験所なるものを作らしめ、その上に、前述した「ひじり」の遊行的性格、「頭陀巡礼」とが入唐僧の靈蹟巡拝と云う事に影響されて、靈験所巡礼なるものを形成せしめたのである。

最後に三十三所の数であるが、之は勿論、観音の三十三身に擬して作られたものである事は云う迄もないが、その他に、数量的信仰の影響があるのではなからうか。之は信

仰の深さを数によつて示そうとするもので、かの小豆念仏（願西、元亨釈書）三十万基塔供養（白河法皇、保安三年百練抄）或は寺院參詣二千度詣（宇治拾遺）又後白河法皇の三十三間堂に於ける一千体の観音像安置等々挙げられるが、之等全て数の少ないことより多い方が、信仰が強いと

考えられ、又利益も多いと云う考えであり、之等は既に一〇〇〇年頃からあつたわけであり、その思想の上に、観音靈驗所參拜も、一ヶ所より二ヶ所、二ヶ所より三ヶ所參拜する方が利益が多いと云う様になり、之が三十三身と結びついて三十三所になつたのではないかと考えられる。平安末期の百塔巡礼（山槐記治承四年 一一八〇）等数の多い巡礼が見出せるのも、数量的信仰の影響があつたことがうかがわれる。

結局、末法到来の思想が、未来に安楽な世界を求めると共に、現世に於ても利益を得ようとする事が、観音信仰を盛大ならしめ、それが観音三十三所巡礼と云う信仰形態に發展したのであるが、その根底には、観音示現説による靈驗所の成立、「ひじり」の遊行的形態並びに頭陀巡礼の流

行と入唐僧の靈蹟巡拜の影響、更に数量的信仰の発生、と云うこの三つの基盤の上に観音三十三所巡礼は形成されたものであると考えられるのではなからうか。

### (五)

以上述べ來つた事を要約するならば、観音三十三所巡礼の形成は、何時、誰がと明瞭に規定する事は出来ない。それは、時代の推移と共に漸時形成されて來たのであろう。

(二)に於て示した如く、平安仏教が、仏教本来の道をはずれ、祈禱万能主義に墮し、呪術的となり、個人的現世利益信仰に伴なつて、仏像や寺院にそれぞれ靈驗利益の名を得るものが現われ、それは、数理を離れた一般の信仰対象となつて來たのである。ここに現世利益を授ける観音靈驗所と云われるものが成立したのである。しかもそれが、平安末に於ける末法到来の思想に影響され、法華經普門品の七難消滅の思想、現在、未来に平安を求め、幸福を求める思想が平安末に於ける観音信仰發達の原因となり、観音靈驗所の増加及びその普遍化となつて現われたのである。

こうした状態にあつた観音信仰が、当該社会の一修行形態である「ひじり」の遊行的な性格、並びに頭陀巡礼の流行と云う相に影響され、又入唐僧による大陸観音信仰の影響と、靈蹟巡礼の姿に刺戟され、更に十一世紀頃から起つた數量的信仰と、之等種々の外的要素の上に観音三十三所巡礼が一〇〇年少し前から一一〇〇年前後にかけて形成されたと考えるのである。こうして形成された三十三所巡礼が、鎌倉以後、種々の変化を経て現在に至つたのであるが、その間には、又、三十三所巡礼の変遷と云う問題も取り上げられるが、それは機会があれば再び取り上げる事として、以上で表題の考察はとどめたい。

以上

平安時代に於ける観音靈驗所一覽表

									靈異記 810 823												
									三宅絵詞 984												
								熊野	本朝法華驗記 1040												
								熊野	今昔物語 1077以前												
								熊野	梁塵秘抄 1169												
								熊野	宝物集 1157 1195												
長命寺 (近江)	観音正寺(内傘山) (近江)	谷汲寺 (美濃)	竹生島 (近江)	松尾寺 (丹後)	成相寺 (丹後)	書写山 (播磨)	法華堂 (播磨)	清水寺 (播磨)	仲山寺 (摂津)	勝尾寺 (摂津)	総持寺 (摂津)	剛林寺(藤井寺) (河内)	施福寺(榎尾寺) (和泉)	南円堂 (大和)	長谷寺 (大和)	竜蓋寺(岡寺) (大和)	南法華堂(壺坂寺) (大和)	粉河寺 (紀伊)	金剛宝寺(紀三井寺) (紀伊)	那智山 (紀伊)	覚忠三十三所巡礼記 1161

